様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７３０７０１

研究課題名（和文）　人と人との関わりを高めケアリングを育む家庭科授業プログラムの開発

研究課題名（英文）　Development of Home Economics program for caring relationships

研究代表者
貴志　倫子（KISHI　NORIKO）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60346468

研究成果の概要（和文）：家庭科の学習内容の整理と，米国「家族と消費科学」における動向把握をふまえ，人と人との関わりに焦点をあてた授業プログラムを提示した。うち，小学校での家族との共有時間，中学校での家事労働と家族の関わり，高等学校での高齢者福祉を題材とした授業の実施，分析により，ケアリングを育む家庭科指導のあり方を考察した。その結果，他者との関わりの相互性に目を向ける教師の発問や役割演技,体験的実習の効果を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study suggested a Home Economics program by focusing on ways and skills for interpersonal relationships. To make up the program, the course of studies and the textbooks of Home Economics for elementary through high school were examined. In addition, the trend of caring education in the U.S. Family and Consumer Science gave some useful viewpoints to plan the program. The ways of teaching interpersonal relationships were studied through Home Economics lessons about time spend with family at elementary schools, and lessons about household work and family in a junior high school and elderly care in a high school were practiced and analyzed. As a result, a means of asking questions for coming to an interaction with others, and learning through role-playing and practical activities were effective to bring up caring attitudes among children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：家庭科，ケアリング，人間関係

１．研究開始当初の背景

学校教育全体をとおして，子どもが人やものに関わる力を高めようとする教育実践の必要性は高まっており，ケアリングが注目されている。ケアリングとは，人や生物などの対象に心を砕き，いつくしみ，世話する関わ

りにおいて，ケアする主体とケアされる対象との関係を相互的なものととらえる概念である。米国の教育哲学者ネル・ノディングズの研究成果を中心に，ケアリング教育の導入が提言されている。日本におけるケアリング教育の議論では，道徳教育や環境教育での言及が中心で，教科教育学的研究はほとんどなされていない。

筆者はこれまで，ケアリング教育を「ケアを媒介とする二者の相互の関係性を築き，維持するのに必要な，態度と技術，意欲を子どもにつける教育実践」と定義し，主に高等学校の学習指導要領と教科書分析よりケアリング教育として家庭科教育が重要な役割を果たす可能性をもつことを指摘した。そして，日本の家庭科教育に影響を与えてきた米国「家族と消費科学」(Family and Consumer Science=以後 FSC と略)の全国および 11 州の学習スタンダード，教科書等の分析を進め，FSC でケアリングを積極的に育む視点が整理され，いくつかの提案がされていることを明らかにした。

上記の文献研究をふまえて，ケアリングを育む家庭科教育モデルを作成し，1999 年版学習指導要領にもとづき構成された高等学校家庭科の授業分析と学習者の実態把握をもとに，高等学校の授業開発を行った。しかしながら，実践による授業の精緻化および，小・中学校での学習内容の検討や学習の系統性の考慮に課題を残していた。

そこで，この課題解決にあたり，ケアリング論の整理が先行する米国の具体的カリキュラムや授業事例の収集から指導法の知見を得，日本の授業プログラムを提示，実践することは家庭科におけるケアリング教育の推進に示唆を与えると考え，本研究を着想した。

２．研究の目的

本研究課題の目的は次の２つである。

(1)米国 FSC における授業実践の収集と分析を行い，実践レベルでケアリングの視点がどのように生かされ，指導されているのか明らかにする。

(2)日本の家庭科教育の蓄積と(1)で得られた知見をもとに，ケアリングを育む小学校から高等学校までを見通した家庭科の授業プログラムを作成し，実践，評価する。

３．研究の方法

以下の方法により，研究課題を遂行した。

(1)米国FSCにおけるケアリング教育の動向把握

文献研究をもとに米国の研究者および関連各州の教育局へ情報提供を依頼し，授業実践の視察を行った。

なお，FSC の実施科目は，州によって多彩である，必ずしも全ての州でケアリング教育に関する実践が行われているわけではない。そのため，依頼可能な研究者および州は制限された。具体的には，米国の FSC 教育研究者 Dr. Mary Pickard の協力を得て，米国ノースカロライナ（NC）州の教育局と学校およびヴァージニア(VA)州の学校へ情報提供と授業視察を依頼し，平成 22 年 3 月に実地調査を行った。

授業に加え，教科担当教諭へのインタビューにより，カリキュラム構成および FSC に関する課外活動の実施状況を把握した。またNC州家政学会でのプレゼンテーションを通じて現地研究者，教師と交流を図り，FCS カリキュラムおよび中等学校における授業の実態，課外活動である Family, Career and Community Leaders of America(以後 FCCLA と略)についてインタビューを行った。

(2)収集資料の分析と日本の家庭科教育への含意をふまえた授業プログラム開発

教育制度，家庭科の位置づけおよび学習者の実態が異なる米国の教育背景に留意し，日本の家庭科教育への示唆を考察した。

ケアリングの理論と米国の事例調査等の知見，および新学習指導要領の学習内容と各学校段階に特徴的な要素を取り出し，授業プログラムの検討を行った。

(3)家庭科におけるケアリング視点を導入した授業プログラムの試行と汎用化のための課題検討

プログラムの一部について学習指導案を作成し，協力校に依頼して授業実践を行った。児童，生徒のケアに対する認識等の分析により，教材及び指導法の効果をとらえた。

上記をまとめ，人と人との関わりを育む家庭科授業を系統的に行うための課題を考察した。

４．研究成果

(1) FCS におけるケアリング教育の取り組みと課題

NC 州と VA 州の中学校３校，高等学校２校を視察した。NC 州教育局が示す FCS カリキュラムは，米国の多くの州同様，キャリア技術教育の一教科としておかれ 17 科目から構成されていた。ケアリングは主として高校生向けの「親業」「児童発達」の科目で扱われている他，中学校の FCS 科目である「キャリア探求」「生活スキル探求」のなかで，その必要性が取り上げられていた。

うち，NC 州 Wake Forest-Rolesville 高校で参観した「児童発達Ⅰ」の授業では，課外活動として行った幼稚園実習の気づきを共有する場面で，ケアの質や教員と園児の関わりの相互作用性を生徒の議論によって導き出すなど，専門職としてのケアリング形成の重要性が議論されていた。

VA 州 Stonewall Jackson 高校の「子どもの発達と親業」の授業では，FCS の教室に隣接する保育室の保育士から指導を受けながら部屋の環境改善を行う活動や，子どもと触れあいながら玩具製作を行う活動が取りいれられていた。ケアし，ケアされる立場双方と関わる場の設定がされ，ケアリングを学ぶ場として，FCS の存在意義は大きいことが見て取れた。なお，保育室に預けられているのは若年妊娠により親となった同高校生徒の子どもであった。親である生徒には，FCS のうち2科目が必修として課されていた。FCS が，いわゆるアカデミックな教科を苦手とする生徒や，10 代で親となり不安定なケア関係に陥りがちな生徒の受け皿として機能しているゆえに行われている実践とみることもできた。

高等学校における FCS 科目は，学期末に州の共通試験が課されるために，授業内容が州の学習スタンダードに規定されるという特徴をもっていた。共通試験導入によって授業の標準化が進み，経験の浅い教師のための教材等が充実した利点があることは授業観察からも伺えた。ピアエデュケーションの重視や議論，プレゼンテーションによる情報発信を多用した指導法が多く，学習者の人間関係形成力向上を促していた。

一方，FCCLA 活動では，活発な地域活動や乳幼児と継続的に関わる取り組みがなされ，ケアリング形成に重要であると教師に認識されていた。しかし，課外活動のための時間や資源の配分は，共通試験に直接貢献しないという理由から個々の教師の力量にまかされ，活動の実施や質に課題が認められた。

NC 州，VA 州の実態から，FSC におけるケアリング教育は，とくに高等学校ではケアの専

門職育成と，必要に迫られた生徒のための実用的プログラムの位置づけが強かった。学ぶ生徒層が限定的であるゆえの指導内容は，日本の義務教育および高等学校共通教科として行われる家庭科に，適さない面も含まれる。その一方で，少人数での集中的なプロジェクト方式による学習やプレゼンテーションの機会，体験的実習の設定など，実践的に他者と関わりを持たせる指導の工夫は，ケアリング形成に有効であると認識されていた。課外活動促進の取り組みも，日本の家庭科に示唆を与えると考察された。

(2)人と人との関わりに着目した授業プログラムの提案

上記FCS視察から得られた知見および日本の学習指導要領の内容整理より，小学校から高等学校までを見通して，人間関係形成力を養う家庭科の学習内容をプログラムとして配列した。「身近な他者」として家族と地域の人との関わり，「遠い他者」として社会における人との関わりを対象とした内容に整理した。各学校段階の特徴的な内容として，小学校では，自分と家族の関わりについて，家族とともにすごす時間を考え生活時間や関わり方を工夫すること，中学校では，家族の家事労働分担，高等学校では，高齢者の生活と福祉の題材に注目した。それぞれについて中心となる学習方法を提案した授業指導案を作成した。

(3)授業実践と評価および指導上の課題

小学校５年生，６年生を対象とした生活時間から家族の共有時間をとらえる授業分析を行った。その結果，生活時間から家族との関わりの課題認識をして，具体的課題解決に向かう際，発問により教師から関係の相互作用に着目させる視点を与えられたり，課外活動として継続的に家族と関わる機会を促されることにより，自分が家族からケアされるのみでなく，家族に対してケアする存在であることにも気づく児童の発言や記述が認められた。

中学校では，１年生を対象に，ロールプレイを用いた家族の家事労働分担の授業を実施，分析した。疑似家族をつくって行うロールプレイは，家族内の協力の必要性に目を向けさせることには有効であるといえた。しかし，ケアリングにもとづく家族関係の形成のために家族以外の資源を活用する必要性まで思考を促すためには，現実的なデータの活用から自己や他者の状況把握をさせる手立てに課題が残された。

高等学校では，１年生の「家庭基礎」において，介助実習，演習を伴う実践を行い，分析した。その結果，短時間でもペアを組んでの実習体験をもたせることで，他者を意識し，ケアの相互性を体感した生徒の記述が多く認められ，実践的活動がケアリング形成に寄与すると考察された。他方，ケアリングの必要性を自己の生活や社会的ケアの課題に当てはめて考え，自主的活動やピアエデュケーションにつなぐまでには至らず，時間配分にゆとりをもたせた指導計画や教科にとどまらない課外活動との関連づけの模索が課題として残された。

家庭科における人と人との関わりを育むための授業実践より，家事労働や介護が，ケアする側からケアされる側への一方的営みでなく，人と人との相互作用により営まれる生活行為であるとの認識を児童生徒にもたせる効果が認められた。人と人との関わりを学ぶ際に，児童生徒同士が学び合う場の設定は有効であると確認されたものの，実際の演習や実習指導において，教師の働きかけが意図的になされなかったために学び合いが機

能しなかった授業場面も散見された。

小学校から高等学校に通底するケアリングの基本的原理にふれる機会をプログラムとして長期的かつ継続的に実践を進めると共に，教師教育としてケアリング概念の認識を促すこと，および教師の力量に大きく左右されないための精緻な教材開発が今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計４件）

①貴志倫子，人と人との関わりを促す生活時間学習の検討-小学校家庭科の授業分析より，家政学会第 65 回大会，2013.5.19，昭和女子大学（東京）

②貴志倫子，人と人との関わりを育む高等学校家庭科の授業開発-介護のケアリング関係に焦点をあてて-,日本教科教育学会第 38 回大会，2012.11.3，東京学芸大学（東京）

③貴志倫子,高橋　久美子，高等学校家庭クラブ活動の活性化における課題：授業とつなぐ学習会活動を事例として，日本教科教育学会第 36 回大会，2010.10.3，弘前大学(青森)

④貴志倫子 米国家庭科におけるケアリングの育成－ノースキャロライナ州を事例に－，日本家庭科教育学会九州地区会第 14 回大会，2010.7.25，福岡教育大学(福岡)

〔図書〕（計１件）

①貴志倫子，第１章　家庭科の存立基盤　第 1 節　生活の現状と家庭科への期待　「家庭科の授業をつくる-授業技術と基礎知識-(小学校編)」（共著）学術図書出版(2009)　2-9 2009 年 5 月

〔その他〕（計１件）

①Noriko　KISHI，Home Economics in Japan: A caring perspective，North Carolina Family and Consumer Sciences Annual Conference，round table，2010.3.5，Wilmington，　NC (USA)

６．研究組織

(1)研究代表者

貴志　倫子（KISHI　NORIKO）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60346468

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし